

『ダイダロス ——技術者倫理について』（擬プラトンの対話篇）

ソクラテス「名高い技術者の君が、近頃、倫理の勉強をしているというのは本当かい、ダイダロス？」

ダイダロス「そうだよ、ソクラテス。最近では、イカロスの痛ましい墜落事故だけではなく、技術にかかわる大事故や事件が起きるようになって、技術者は公衆の安全・健康・福利を守ることが第一に求められるようになったからなのだ。でも、それは君たち哲学者がおしゃべりをしている魂の世話だとか、徳を備えるといった高尚な絵空事とはちがって、われわれ技術者が専門職として備えるべき技術者倫理というものなのだ」

ソクラテス「なんだって。君の話では、君が身につけている技術者倫理というのは、倫理の一部ではないのかね」

ダイダロス「君たちが、ぼそぼそと話している倫理とはまるで違っていて、モノをつくる技術者もつ倫理だから、哲学者がいう倫理とは違うのは当たり前さ。君たちは大昔に書かれた本を読んでは、それについてどうでもいい解釈をさも難しそうに話しているけれど、技術についてはまったく素人じゃないか」

ソクラテス「君の言うとおりで。私は君がつくる飛行機械や自動化された機械については、まったく知識をもちあわせていないからね。でも、君のいう技術者倫理とは、技術を知らない者には、学ぶことも教えることもできないものなのだろうか？」

ダイダロス「技術を知らない大衆が学ぶのには意味がないし、たとえ哲学者であっても、技術を知らない素人が教えられるのは一般的な倫理にすぎないから、技術者倫理を教えるには実際には役に立たない。技術者が自分の経験を基に技術者倫理を教えるのが最もふさわしい」

ソクラテス「では、君はその技術者倫理を誰からどのように教わったのだろうか？やはり君の技術の先生からだろうか？」

ダイダロス「いや、私の技術の師は立派な方だったけれど、われわれの学生時代にはとくに技術者倫理という科目はなかった。だから、最初は外国の本を読んで勉強したけれど、やはり、国が違えばモノづくりの仕方も法律も企業経営も違っているから、自分たちのモノづくりの現場にあった技術者倫理を自分で工夫したのだ」

ソクラテス「やっぱり、工夫（メーカーネー）とは、君たち機械学（メカニクス）の専門家のためにある言葉だね。それで君のいう技術者倫理は、どのようにして公衆の安全や福利を守るのだろうか、まさか君の技術によってもたらされる経済的利益のことを言っているのではなさそうだが」

ダイダロス「われわれの技術が社会にどれほどの貢献をしているか、哲学者の君は真剣に

考えたことがあるかい。資源の乏しいこの国に今日の経済的な利益と繁栄をもたらしているのはわれわれの技術にほかならないのだから、君たちはもっとわれわれに正当な敬意を払ってしかるべきだ。しかし、技術者倫理がかかげる公衆の安全や福利を守るというのは、技術の使い方を誤らずに、技術の行使によって人間の健康や生命を危険にせず、地球環境に悪影響を与えないようにすることだ」

ソクラテス「私は例のデルポイの神託を受けてから、高名な政治家やジャーナリストや知識をもつといわれる人たちをたずねて、彼らが本当には何ら確実な知識をもっていないことを見出したけれど、君たち技術者たちだけが確実な知識をもっていることを自分の『弁明』で述べているよ。でも、今は私にもわかるよう応えてくれたまえ。技術者倫理とは、公衆の安全や福利のために、技術を正しく用いること可能にする倫理のことだろうか」

ダイダロス「そのとおり。だから、技術者がこの倫理については誰よりもよく知っている」

ソクラテス「ではどうだろう。技術を正しく用いるためには、その技術について正しい知識をもつ必要があるだろうね」

ダイダロス「もちろんだよ、日進月歩の技術革新にあわせて、技術者はつねに現在の技術水準に追いつくための継続教育が欠かせない」

ソクラテス「それでは、ある技術の正しい知識は、その技術を学ぶ過程で習得され、その技術の名前でも呼ばれるのではないだろうか。たとえば、機械や生産システムをコンピュータで制御するためのメカトロニクスの正しい知識は、機械制御技術と呼ばれるのではないだろうか、それとも違うかね」

ダイダロス「そう呼ばれている」

ソクラテス「ではその機械制御技術を正しく用いるのに、その知識以外に必要とされるものが何かあるのだろうか？」

ダイダロス「たとえ正確な知識をもっているとしても、残念ながら上司や経営上の圧力があつたり、顧客からの無理な要求があつたりすることがある。グローバル化時代の厳しい価格競争のなかで、厳しい納期に間に合わせるためには、費用便益の観点から安全性をトレードオフすることが求められる場合もある。しかし、コストと安全性を天秤にかけるといのは、本来はあってはならないことだから、そのために技術者は技術者倫理を学んで公衆の安全性を最優先する」

ソクラテス「つまり、技術者倫理を身につけた技術者は自分の業務を遂行するうえで、自分の経済的利益よりも公衆の安全性が大切だと判断して行動するようになるのだね。自分の利益よりも他人の安全という利益を優先することがより善いことだと知り、そのように行動できるようにさせるものが、技術者倫理と呼ばれるものなのだろうか」

ダイダロス「そのとおり、君もようやくわかってくれたようだ」

ソクラテス「ところで君、技術者は多くの場合、企業から自分の働いた報酬を得るのだろう。しかし、もし技術者が技術者倫理に従って会社が利益を失う場合には、技術者は自分の利益をも失うことにならないだろうか」

ダイダロス「企業経営を長い目で見れば、目先の利益のために不正なことをすれば企業自体の存亡にも関わるし、最近では公益通報者を保護する法律もあって、公益通報をした技術者を解雇したり、不当な処遇をしたりすることは罰せられる」

ソクラテス「内部告発というのはたしかに最近よく聞く言葉だね。私もつい先日、自分の親を殺人の罪で訴えようとする息子に出会ったばかりだ。たしか、エウテュプロンという名前だった。それはともかく、技術者倫理をもつ者は、自分の直接的な利益よりも、公衆の利益の方を優先するのだね。すると、自分の利益や企業での自分の地位よりも、他人の利益の方を優先するためには、その人は自分の賃金や地位などの利益よりも、何か他に高い価値を認めているものに従って行動しているにちがいない。それはいったい何だろうか」

ダイダロス「誇りだよ。専門職としてのプライドによって、自分の利益を犠牲にすることができる」

ソクラテス「君はやはりとても高潔な人だと思うよ、ダイダロス。富や社会的地位や権力という〈外的な善〉は、それだけでは決して善いものではなく、善悪を知る理性に従って正しく使えば、それをもっている人にもまた他人にも益があるけれど、もしその理性に従って正しく使うことができなければ、その人間自身にもまた他人にも大きな害になるということは、われわれ哲学者がいつも問題にしていることだから。その善悪の知識を、われわれは知恵（ソ피아ー）と呼んだり、徳（アレテー）と呼んだりしている。つまりところ、君の言っている技術者倫理は、われわれ哲学者が語ってきた倫理とけっきょくは同じことになるように思えるのだが、どこか違うのだろうか」

ダイダロス「専門知識に関わる点が違うのだよ」

ソクラテス「専門知識や技術は、その技術を正しく用いる技術者倫理とは別々のものではなかったのだろうか」

ダイダロス「いや、ほんとうのことを言えば、技術の知識を正しく学べば、その知識を正しく用いることもできるようになるのだ」

ソクラテス「では、技術者倫理というのは不要になるのかね」

ダイダロス「だから、私も学生時代には学んだことがなかったけれど、技術者としてこうして立派な名声を得ている。ただし、それが不要だと言っているのではなく、私としては技術を正しく学ぶことを技術者倫理と言いたい」

ソクラテス「その場合に、正しくというのは、専門知識として正確にということだろうか。それとも、技術を用いる対象に与える影響や技術がもたらす結果が正しいということだろうか」

ダイダロス「その両方を含んでいる。技術には、その対象についての正確な知識だけではなくって、その対象をより善くするように配慮し、よりすぐれたものにするということが含まれているのだ」

ソクラテス「つまり、技術は道具のように、使い方によっては人を傷つけたり害したりす

るものではなくて、技術が技術であるかぎり、人に害を与えたり環境を悪くしたりしないということだね。技術は本来のあり方としても倫理を含むという君の主張は、少なくとも私はとても健全な考え方だと思う」

ダイダロス「それが最初から私が言いたかったことだ」

ソクラテス「それでは聞くけれど、技術が対象に与えた影響やその結果について、それが正しいかどうかを知っているのは、その技術によってモノを作る技術者だろうか。それともそれを用いる人、技術によって作られた物を使う使用者だろうか」

ダイダロス「私が考案した発明や機械については、私が誰よりも熟知している」

ソクラテス「それはそうだね。しかし、君の発明がもたらした結果が善かったか正しかったかどうかは、誰が最もよく知るだろうか。それを作った君だろうか。それともそれを使う大衆だろうか」

ダイダロス「君の問いに対しては私なりの考えがあるけれど、ここで語るにはおそらく話が長くなりすぎるし、その話の続きは今年の 8 月にある機械学会のワークショップに来てほかの者たちといっしょにやらないかね。何でもそのワークショップでは技術者倫理教育を大学で実践している教育者が全国から集まってくるらしい。われわれのように技術を専門にする者もいれば、君の仲間の哲学者もいるということだ」

ソクラテス「それはとても面白そうだね。ぜひそのワークショップには参加させてもらおうよ。私には君が学んでいるという技術者倫理がとても気になって仕方がないのだ。君たちの技術が生み出しているモノやサービスとの関わりなしに、われわれはもはや一日たりとも過ごすことができなくなっているし、この世界の行く末はどうやら君たちの技術にかかっているのだから」